

先進図書館見て歩き

高崎市立中央図書館

平成23年4月1日、合併により人口37.5万人の中核市となった高崎市に、新しい「高崎市立中央図書館」が開館した。老朽化し手狭になった市立図書館（高崎市末広町）を新しく建設した高崎市総合保健センターとの複合施設（高崎市高松町）として5階6階に移設したものである。末広町は元首相中曽根康弘生誕の地であり、道路沿いに商店が並ぶ人口が密集した住宅地であったが、近年は人口が減少している。いっぽう高松町は近世には高崎城丸の内の地域で、戦後は学校、保健所、病院、税務署、裁判所など多くの公共機関がある地域。新中央図書館は高松中学校の隣に建設された。

1. 建築上の工夫

広々とした敷地に総合保健センターが建ち、その裏側に隣接して400台収容できる立体駐車場が建っている。その立体駐車場から総合保健センター・中央図書館へは連絡通路（ブリッジ）が掛けられ、雨の日も濡れずに入館することができるようになっている。

建物の特徴は、中央部に1階から6階までのひょうたん型の吹抜を設け、設計者は「だるまボイド」と呼んで、環境に配慮した仕組みを満載した装置としていることである。「だるまボイド」の天井部は採光機能があり、自然光が吹抜を通して各階に行き渡っている。また、吹抜と図書館のスペースはガラスで仕切られ、冷暖房の効率と安全を確保している。

図書館については、この吹抜を取り巻くように諸室を配置せざるを得ないため、開架スペースはある程度小さくなる。また、書庫を図書館スペース内に設けず、1階2階の一部に自動化書庫（コンピュータで本の出し入れを管理し、ボタン1つで本が自動的に出てくるもの）を設置し、書庫出納の合理化を図っている。



館内見取り図：高崎市立図書館HPより
<http://lib.city.takasaki.gunma.jp/index.html>



5階の一般開架エリアにデッキ付きの「静寂読書室」を設け、外の景色を楽しみながら本を読むことができるようにしている。これは、児童エリアと一般開架エリアが同じ1フロアにあるため、静かなところで読書したいという人のために設けられたものと思われる。同じように、ガラス張りにして外部の騒音が侵入しないようにした研究用個室も用意されている。床は児童エリアも含めすべて板張りにしてあるが、絵本コーナーは直に座っても痛くないようコルク張りになっていた。

建物の外観が大きい割には、開架スペースが広いと感じないが、開架スペースには「公開書庫」として書架と書架の間の通路を狭くしたスペースを設けて、比較的利用が見込まれ、且つ刊年が古い資料を配架している。利用者が直接手にとって閲覧できる蔵書を増やすための工夫である。しかし、通路が狭いので利用者には、通常の開架スペースより使いにくく感じられるかもしれない。



2. IT化とセルフ化

ITの推進がこの図書館の重点事業であり、新図書館では、セルフ貸出機、セルフ予約受取室、セルフ複写機、インターネットパソコンを設置している。パソコンにはパソコン専用のセルフ複写機に接続し、検索した結果をプリントすることができるようにしている。セルフ貸出機は成人用と子ども用とを

別の仕様とし、子どもも自分の目の高さで操作できるようにするなど細やかな配慮がしてある。貸出・返却のセルフ化は、利用が増大しても職員を増やせないという財政事情から、今後建設される図書館ではどこでも標準設備となるにちがいない。



館内の蔵書検索端末はタッチパネル式のものどキーボード式のものど両方用意して様々な利用者に対応している。

高崎市立中央図書館の中で特に目をひくものは、視聴覚資料の所蔵量である。CDやビデオ、DVDなど約7万点の資料が、本と同じように開架に配架されている。利用する人は棚からCDを持出し、「視聴覚資料館内利用申込書」に記載して、あとはセルフで機械に挿入し視聴するようになっている。

これだけセルフ化したら、窓口で職員が利用者の対応をすることも少ないのではないかと思われそうだが、訪れた土曜日の午後は、5階の貸出返却カウンターの12人の職員と6階のレファレンスカウンターの4人程度の職員のすべてが同時に、利用者との対応に追われていた。1日平均2,000人の利用があり、これは従来の2倍とのことである。街なかの賑わいにつながればという期待と、旧館があった末広町の飲食店からは図書館がなくなったため客が減って困っているとの声もあるそうである。

延床面積	8,756.55㎡
全収蔵容量	約700,000点
開架(含AV)	約300,000点
うち児童書	約30,000点
駐車場	400台

(本館 亀澤)

鉄道を愉しむ

富山地方鉄道を舞台にした映画「RAILWAYS (レイルウェイズ) 愛を伝えられない大人たちへ」がもうすぐ公開になります。主人公は定年退職を前にした地鉄の運転士で、私たちになじみのある風景や現役車両も多く登場します。

全国の鉄道ファンにとっても、富山の美しい風景を背景に走る地鉄の車両や、ライトレールは憧れの的となっています。今回は、こうした地域を走る車両をはじめ、鉄道の魅力が味わえる本を紹介します。



『鉄道旅へ行ってきました』

酒井 順子 関川 夏央

原 武史／著

講談社 2010

鉄道好きで知られる作家、酒井、関川両氏と、鉄道に深い造詣を持つ原氏が、気になる鉄道や路線に乗り込み、語り合います。なかでも、「徹底検証北陸駅そば五番勝負！北陸本線」では、駅のホームで味わう立ち食いそばを、そのロケーションとともに採点しています。(表紙の写真は富山駅で撮影されたものです。)

原氏は駅のホームで味わうグルメに詳しく、おすすめ駅の他に二人を案内しているのですが、その中でも三氏が満場一致で富山駅のそばを賞賛しています。これには、そばの味だけではなく、美しい立山連峰を見ながらそばを味わえることに大きなポイントがあるようです。

また、全国の路面電車の中で注目されているのが、富山市の中心部を走るセントラムです。ダイナミックなフォルムはインパクトがあり、街の景観ともよく調和しています。『市内電車環状線のトータルデザイン』(富山市都市整備部路面電車推進室 2010)に

は、セントラムが関連するすべての要素のデザインを構想から設計、製作など一貫したコンセプトで整備されたことが記されています。景観を含めてトータルデザインされた車両、電停、道路などは魅力ある街路空間を作り出しています。写真や図版も多く掲載されており、「セントラムについて知りたい」というときに最適です。

さて、最新の車両がある一方で、昔から走る車両や時刻表には郷愁を誘われます。『時刻表タイムトラベル』(所澤 秀樹／著 筑摩書房 2011)では、著者が偶然見つけた古い時刻表から、今と昔の交通事情の違いに驚きながらも過ぎ去りし日に思いをはせます。時刻表は、時を経れば経るほどに、読み物としての魅力を醸成させていくものであり、昔の時刻表を読み込んでいくと本当にその頃にタイムスリップしたかのような錯覚におちいってしまうと著者は言います。懐かしき食堂車のカレーや上野発の夜行列車など、昔の時刻表を読み込んで時空の旅に出かけたくくなります。



『車掌の仕事』

田中 和夫／著

北海道新聞社 2009

また、実際の鉄道の旅では、運転士や車掌さんの仕事ぶりを眺めるのも楽しいものです。この本の著者は昭和33年から元札幌車掌区で車掌の仕事に27年間従事しました。車掌は安全面やサービス面など、実に幅広い仕事をこなしています。車内放送、車内改札、接客業務など、列車が動き出したら一人で運行の責任を負います。国鉄時代から民営化までの著者の経験を基に、あまり知られていない車掌の素顔を綴っています。(本館 高田)

レファレンスあれこれ

Q. 岐阜県にある荘川桜と呼ばれる2本の桜の木は、もとは白川郷の照蓮寺と光輪寺の境内にあったもので、御母衣ダム建設時に移植されたと聞いた。照蓮寺や光輪寺も移築されたのか。

A. 秋の深まりとともに野山が色づき始めたこの時期、旅行にでかける方も多いのではないだろうか。図書館にも旅行ガイドブックを借りに、また旅先の情報を事前に得ようと多くの方が訪れる。この問い合わせも、旅先で見聞きしたことをより深く知ろうとする利用者から寄せられたものだ。

まず、古代から現代までの古刹を調べることができる参考図書『日本名刹大事典』（雄山閣出版 1992）を見ると、高山市には照蓮寺が2カ寺ある。高山市鉄砲町にある通称「高山別院」と呼ばれている光耀山照蓮寺は、もと白川郷中野にあったが、天正16年（1588年）に現在の地に移された。光耀山照蓮寺が移転した後、中野には本堂が残され、長らく「心行坊」と呼ばれ存続した。しかし、昭和27年（1952年）に御母衣ダム建設計画が起こったことから、昭和36年（1961年）に高山市堀端町の高山城跡に移築され、通称「城山照蓮寺」と呼ばれているとあった。

このことから、後者の「城山照蓮寺」が利用者の探していた寺であることがわかった。照蓮寺については、参考図書では『岐阜県百科事典 上巻』（岐阜日日新聞社 1968）、『郷土資料事典 21巻 岐阜県』（人文社 1997）、また、一般図書では史跡や文化財を訪ね歩く時に役立つガイドブック『岐阜県の歴史散歩』（山川出版社 2006）に記述があった。その他に、『高山市史 下巻（復刻版）』（高山市

1981）には、白川地方への宗教の伝播や飛騨文化との関わりとともに詳しく記されていた。

続けて、光輪寺を調べるが、先の『日本名刹大事典』や『全国寺院名鑑 中部篇』（全日本仏教会寺院名鑑刊行会 1970）の寺院の事典には項目がない。

そこで、御母衣ダムの関連の資料を調査し、『御母衣ダムと荘白川地方の50年』（まつお出版 2011）を見る。この本は、御母衣ダム建設から今日に至るまでの荘川村、白川村が辿った道のりをまとめたもので、桜の木の移植や後の管理などの記述はあるが、光輪寺の移築については見つからない。

荘川桜についてインターネットで検索すると、御母衣ダムを管理する電源開発株式会社が運営するHP「荘川桜 一受け継がれていく人々の思い」（※1）があり、詳しく紹介されていた。このサイトでは、樹齢450年余にも及ぶ桜の木の移植の物語を読むことができた。その中で光輪寺について湖底に沈むと表現されていることから、光輪寺は移築されなかったものと思われる。

こうした地域の事柄を調べる時には、郷土の百科事典がとても参考になる。富山県にも『富山県大百科事典』（富山新聞社 1976）や『富山大百科事典』（北日本新聞社 1994）があるが、歴史、地理、人名、社会、自然、文芸など県に関わるあらゆる事項がとりあげられており、端的な解説はわかりやすく、また調査の手がかりにもなる。

今年、図書館では、現在入手可能な39都道府県の百科事典を購入した。本館の参考図書室に揃えてあるので、調べものに役立てていただきたいと思う。

（本館 瀬口）

※1 電源開発株式会社HP「荘川桜一受け継がれていく人々の思い」<http://www.sakura.jpower.co.jp/>